

調査研究彙報

雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究 平城宮跡発掘調査部遺構調査室に事務局をおく西南中国民族建築研究会（代表・浅川滋男）は、住宅総合研究財団の助成をうけ、1991年以来、雲南省西北部のチベット・ビルマ語系諸族の住居と集落に関する調査を進めてきた。93年度は、母系社会とアチュ（妻間）婚で有名な永寧ナシ族（モソ人）および奴隷制の遺存で知られる小涼山イ族の調査をおこなった。参加したメンバーは、浅川のほか、杉本和樹、江口一久（国立民族学博物館）、溝口正人（名古屋大学）、高岡えり子（東京理科大学）、王恵君（横浜国立大学）、何大勇（雲南大学）の計7名である。調査期間は7月16日〔出国〕～8月11日〔帰国〕の約4週間で、集中調査したのは瀘沽湖畔の永寧落水村。落水村では、湖岸の下村に母系妻間婚のモソ人、山側の上村に一夫一妻制のプミ族が居住しており、両者の社会・文化の相互変容に着目しながら、居住空間と建築技術に関する多彩なデータを収集できた。これまでの成果としては、①西南中国民族建築研究会「雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(1)(2)」(『住宅総合研究財団研究年報』19・20号、1993・94年)、②浅川「雲南省・永寧モソ人の住まい」(『住まいの民族建築学』建築資料研究社、1994年)がある。
(浅川滋男)

アメリカ考古学会 (The Society for American Archaeology) への参加 1993年4月14日から18日までの間、日本学術振興会の国際研究集会派遣研究員としてアメリカ合衆国セントルイス市で開催されたアメリカ考古学会に出席し、発表を行った。この会議は、アメリカ、カナダ、メキシコはじめラテン・アメリカ諸国を中心に、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどの研究者を含めて3,000人以上の参加者があり、多くの分科会に分かれて発表が行われた。我々の分科会は、カナダ・マックギル大学の井川史子、羽生淳子両氏の司会で、「縄文集落システムに関するシンポジウム」と題し、日本の縄文集落の大規模発掘とその整理分析の方法、そこから導き出される成果について、日本4人、カナダ1人、アメリカ合衆国1人、ヨーロッパ1人が発表し、討論を行った。
(松井 章)

「中石器時代の人類と海」(Man and the Sea in Mesolithic) シンポジウムへの参加 1993年6月14日から18日までの間、デンマーク国、カランボルグ市で開催された後氷期における人類の海洋環境への適応戦略に関するシンポジウムに参加し、縄文時代の貝塚文化の特性を、北欧の貝塚文化と比較して発表した。参加者は約70名で、EC諸国、北欧、旧ソビエト連邦のリトアニア、エストニア、ラトビア、ロシアなどと東欧諸国からの参加者が主であった。縄文時代に見られる大規模貝塚、豊かな精神生活を物語る土偶、装身具、埋葬習俗などは、これまで海外で紹介される機会に乏しく、類例は北欧中石器にみならず、世界のどの狩猟採集民文化にも見られず、参加者の大きな興味を引いた。会議を通じて、ユーラシア大陸の各地で後氷期の狩猟採集民族が、それぞれ固有の自然環境にどのような適応を行ったかを知ることが出来て得るところが多かった。
(松井 章)

薬師寺典籍文書調査 東大史料編纂所との共同調査である。木箱28箱、箆笥1棹、ダンボール箱27箱あるうち、現在木箱第22、25、27、28函の調書作成作業を継続中である。概ね江戸時代のものが多いが修二会関係請定や富くじや証書類など当時の寺内の状況が知られる資料も多い。写真は第19函まで完了。なお典籍文書目録のデータベース化もPC-Pickを使って継続して行っているが、第10函分まで入力済みである。1993年7月。
(綾村 宏・佃 幹雄・館野和巳・寺崎保広・森 公章)

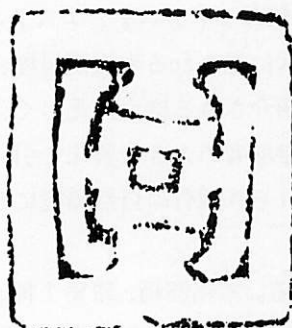
醍醐寺文書調査 醍醐寺文書第17函の文書の撮影。当函はほとんどが鎌倉・室町期の文書である。縦折紙のものなど、古文書料紙の資料として、興味あるものも含まれている。当函撮影完了した。1993年8月。
(綾村 宏・佃 幹雄・森 公章)

新指定古文書等の調査 東京国立博物館内文化庁分室において、93年度重文に指定された静岡県の三嶋大社矢田部家文書および京都府の金剛心院の制札の写真撮影を行った。三嶋大社文書は中世文書を中心として、源頼朝下文、頼家筆般若心経、矢田部家系図などを撮影した。また金剛心院制札は六波羅探題、足利尊氏、守護代発給のものなど6枚を撮った。いずれも正文で小口の墨書や釘跡など、発給揭示を考える資料である。1994年3月。
(綾村 宏・佃 幹雄)

北浦定政関係資料の調査 1992年4月に寄贈を受けた当該資料を岩本次郎調査員が整理目録化の作業を継続して行っている。
(歴史研究室)

その他の調査 古文書料紙調査(上杉文書、東大寺文書、東寺百合文書)に参加。法隆寺医薬調剤古抄の撮影等。
(綾村 宏)

『敦煌建築研究』の翻訳完了 非常勤調査員の田中淡氏(京都大学人文科学研究所)を中心に進められてきた『敦煌建築研究』(文物出版社、1989年)の翻訳作業がほぼ完了した。同書は、中国芸術研究院建築芸術室主任の蕭黙氏が清華大学に提出した博士学位請求論文を公刊したもので、南北朝時代から宋代にかけての敦煌莫高窟壁画に描かれた各種の建築物を、文献史料と対比させて考察している。従来乏しかった唐代以前の建築資料をおぎなうばかりか、古代日本建築の復原研究にも示唆をあたえるところ大である。翻訳に参加したのは、田中淡氏のほか、上野邦一(奈良女子大学)、松本修自(東京国立文化財研究所)、町田章、浅川滋男、島田敏男、藤田盟児(以上奈文研)、黄蘭翔、福田美穂(以上京都大学)、栗原伸治(総合研究大学院大学)の10名である。1990年以来、月に1回のペースで輪読会をひらき、担当者が翻訳した粗訳原稿をメンバー全員で再検討する作業を続けてきたが、あしかけ4年にしてようやく初稿がでそろった。94年度は、この初稿にさらに修正を加え、正式な出版物として刊行する予定である。
(浅川滋男)



平城宮第241次調査出土銅印(左:印影 右:封泥)